

末黒野

すぐろの

5月号（通巻801号）



花きぶし

小川玉泉

刈り株にきらめくは霜町の小田
凸凹の芝生を覆ひ六つの花
笹鳴に思はず杖を止めにけり
霜解けの畑土黒く靴の跡

梅が枝の折れんばかりや雪止まず

犯人は麻紐の端隙間風

葱刻むことに慣れたり朝厨

崖下は波の遊び場花きぶし

焼き加減よしと栄螺をひさぐ姥

囀りや杜を自在に栗鼠跳べる

玄関の隅を陣取り花大根

溪谷の木々森閑と月おぼろ

冴返る

松本三千夫

島指呼に遠富士視野に寒明くる
音立てて新聞ひらく余寒かな
もの置けばたちまち影の冴返る
一枚の石へ黄梅滝なせる
下萌や賽銭箱の錠大き
ものの芽や赤子は拳解かず寝ね
木の芽晴寺の大屋根反り深き
御用邸の松吹く風や干若布
若布干さる葉山の海の風集め
船頭の背の夕日や若布刈船
春潮や彼処の岩に朱の鳥居
空は無垢梅は三分二月十五日や一かず海み師忌

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

寒 明

松田泰子

憩ふ鴨気付かぬほどの昼の月
立ち去りぬ枯木に兜れぬし少女
呼ばれたること紅梅に振りむきぬ
歩かねば紅梅の香に近づけず
湯豆腐や主客どちらも耳遠き
寒明の投網のこぼす日の雫
もう春の山脈として濡れてをり
向き合ひし人の眼鏡に春の山
露のたう萌えてここにも天地あり
人悼むこころの寄りて春寒き

春 隣

安斎久英

禍福なき来し方思ふ古日記
満潮の波間に揺るる寒の月
繚乱の雪美しき恐ろしき
源泉の噴くや冬天震はせて
釣船の帆にきさらぎの風打たせ
黄梅を風押し上ぐる香りかな
流れ藻を拾ふ渚や春隣
降り足りぬ春立つ雨のあしたかな
露の臺傾り隈なく日を満たし
春寒や潜望鏡の顕なる



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句



探 梅 城 戸 緑

寒晴れや木の香の満つる木工所
尼 寺 の 寛 真 青 や 寒 雀
宿坊のざわめく朝の笹子かな
探梅に空の蒼さのありにけり
柚小屋に先客のあり梅探る
祭神の名を長ながと追儺式
掌に受くる傘寿の年の豆

玉 珊 瑚 熊 切 光 子

悲鳴とも電線はしる虎落笛
明星や寒林いまだ昏れのこり
真白なる和毛の吹かれ氷面鏡
御手洗をあふるる光玉珊瑚
余寒なほ体重計の針ふるへ
春雨の音生むまでの間合かな
黄梅や眼下の海は銀色に

寒 の 梅 堺 昌 子

枝々の艶のましたり寒の梅
海よりの風の風よび吉書揚
日がな日の当らぬ田面雪深き
寒林を透かし山容影絵めき
仏の座休耕田をむらさきに
五分咲きや絵心さそふ梅の庭
はづむ声飛び交ひ園の春の昼

日脚伸ぶ

鈴木 一三

日のかげら

森清 堯

どの絵馬も合格祈願日脚伸ぶ
寒晴れや波に孤高の烏帽子岩
息災の根付けを妻に初大師
大試験終へし子の風呂ながきかな
金縷梅や池面を渡る風尖り
勧誘へ居留守使ふや春炬燵
春蘭の花芽を抜くる風硬し

庭隅に香をはなち水仙花
寒の水身ぬちの籬を締め直す
一月の山や色消し音を消し
寒禽の楠より零れ百度石
笹叢にあまねく夕日笹子鳴き
冬蜂の供花より供花へ渡りをり
薄氷を割るやあまたの日のかげら

枝垂梅

西川 みほ

牡丹の芽

森清信子

昨日とは声あらためよ初鴉
年酒やはやも親族の出羽訛
深雪道踏む術聞きし夫の亡き
果てし無き健康談義小正月
豆撒のはじめの声を臆しけり
立春や母子の吊るす御礼絵馬
折々の風に香を乗せ枝垂梅

炉話や汁の根菜たつぷりと
深ぶかと空の掃かれて枯木星
枯蘆や思考回路の錆はじめ
潮騒ののぼる崎や野水仙
本堂の和讃の声や春の雪
杖の母と庭ひとめぐり牡丹の芽
花種や未来を握る赤子の手

青炎集

横浜 岩上行雄

机の上すでにちらかる去年今年

駅伝の手旗へ風の二日かな

雪の坂襖取り下る二十歳の子

雪掻きや清掃員の鍬使ひ

常磐木の日のきらめきや春隣

チエロ背負ふ乙女三人春立てり

横浜 青木由芙

先頭に犬を歩かせ夜回りす

水仙を飾る茶房や波の音

反り橋に早梅の影濃く淡く

春光や柔らに伸ぶる松葉の秀

群がりてつるむや穴を出でし墓

水車小屋を囲む水仙咲き匂ひ

小川玉泉選

横須賀 大川暉美

一椀に海の香溢る新若布

迸る水音春を広げつつ

里山の尖れる風や梅つぼみ

寒念仏太鼓の響く谷戸の道

草萌の土どつさりと鍬の先

住み古りて幾年眺む白き梅

横浜 橋場美篤

左義長のだるまの目より火を噴けり

左義長や子等の遊べる消防車

日差し浴ぶる掛大根や湾の綺羅

朝の日にまばゆく雪の浅間山

耳痛きまで底冷えの長野駅

コンサートへひた急ぐ春のひと日かな



横浜 外山節子

笹鳴と合はず二拍子菜をきざむ

堤防の子等の自転車日脚伸ぶ

逆上がり出来ぬ子一人日脚伸ぶ

春寒の小さくなりたる歩幅かな

バイエルの洩れくる窓のヒヤシンス

動くもの見えねどきらり春の川

横浜 太田良一

酒かけて元気を燃やすどんどかな

寒鯉のひげの先より目醒めけり

熱爛やうしろ気になる国なまり

トンネルに磯の香りや春隣

立春や砂を引きずる漁師網

春立つや庭いつばいに干すシート

横浜 今泉あさ子

初旅や卒寿米寿の姉に添ひ

旧正や古りし仏間の青畳

新年会思はぬ人の芸立ちて

雪深しん晴着のはたち躊躇へる

ぼた雪や袖子を残せし枝撓む

深雪晴れ常より広き宅地跡

横浜 大橋弘子

土鈴振る春のそこまで来てをりぬ

おでん食ふ辛子はいつも皿の角

一と色の雪のつくりし雪景色

かまくらやひよつとこ顔に餅ふくれ

雪椿天気予報の外れがち

豆拾ふ春立つ朝の厨かな

横浜 辻井ミナミ

達磨市隅に売らるる招き猫

どんど燃ゆ目玉ひとつの大達磨

炊立てや銀しやりに割る寒卵

蜷道のうねりの続く細小川

柎を挿す良の窓格子

晴れ渡り鉄路の先の二月富士

横浜 中島ひろし

灯台光寒さ回して居りにけり

ふんはりと枯野に降りぬ熱気球

風神の袋空つぽ四温光

寒明けや紐取り代ふる旅の靴

孕み馬の漆光りに草千里

春寒や外出の件を掌に書いて

耕 土 集

松本三千夫選



雪の朝細き轍を譲り合ふ
合戦の砦を守る雪だるま

新宿 浅岡 麻實

雪の庭沢庵石も景となり

沢庵石持ち上げむとや霜柱

春待つや柱は紅の梢立て

大雪や振袖のひとブーツ履き
臘梅の溶けし光を浴びにけり

川崎 滋野 暁

店先の踏まれし豆や春立つ日

抱きしめて猫の爪切る春寒し

秒針の刻む音して冴返る

雪解けの坂蟹股に葉売り

正座せる毬栗頭籬の客

一礼し新聞少年卒業す

雁帰る水面雄雄しく蹴り上げて

摘み足しぬ考命日の蓬餅

宮城 門間としゑ

鉦彫の円空仏や冬ざるる

水仙の香る汀や牧水碑

石段にジャンケンの声日脚伸ば

太鼓打つ男控へる追儺寺

滝壺に落つる二月の水の音

横須賀 一色奈和美

冬田道歩む標ののつぽビル

糶枯る列を乱さぬ愚直さよ

雪鬼のつけし跡やも輪標

新雪の畝の形に積りをり

雪嶺の赤く染みゆく夜明けかな

横浜 布施由岐子

臘梅に呼び止めらるる心地かな

血流の年相応や雪見酒

命日を曆に記し悴かめり

春時雨硬き蕾に沁み入みて

太陽の窓いつばいに寒明けぬ

横浜 新倉ゆき江